# 血の役割

むすめは、足の指を切りおとし、むりに靴をはきました。そして、王子さまのところへいきました。王子さまは、このむすめを花よめと思って馬に乗せ、いっしょに帰っていきました。ふたりは、お墓に立っているハシバミの木のそばをとおらなければなりませんでした。そこには、二羽のハトがとまっていて、こううたいました。

「クックックー、うしろを見てごらん！
靴のなかに血がでてる
靴が小さすぎるんだ
ほんとうの花よめは、まだうちのなかにいるんだよ！」

これをきいて、王子はむすめの足を見ました。すると、血がふきだしているではありませんか。それで王子は馬のむきをかえ、にせの花よめを、そのうちへつれもどしていいました。

・・・・・略・・・・・・

むすめは、かかとをすこし切りとり、足をむりに靴につっこんで、そして、王子のところへいきました。王子は、このむすめを花よめと思って馬に乗せ、いっしょにでかけました。ところが、ふたりがハシバミの木のそばをとおりかかると、二羽のハトが木にとまっていて、こううたいました。

「クツクックー、うしろを見てごらん！
恥のなかに血がでてる
靴が小さすぎるんだ
ほんとうの花よめは、まだうちのなかにいるんだよ！」

王子は、むすめの足を見ました。すると、血が靴のなかからふきだしているではありませんか。自いくつしたの上のほうまで、すっかり赤くなっていました。それで、王子さまは、馬のむきをかえて、にせの花よめをまたかえしました。

「灰かぶり」『完訳グリム童話Ⅰ』小澤俊夫訳／ぎょうせい

娘が足の指やかかとを切り落とすところ、切り紙細工のように語っていますね。

血は、娘がにせの花嫁であることを証明するという役割をもっています。

けど、おばあさんの姿はあらへん。かわりに、道みちずうっと血落ちてるんやと。その血のあとをずうっとたどっていったら、家の前まで来てしもた。

・・・・・略・・・・・・

「ちょっと見てみ。こんな血落ちとる。ゆうべも来てん」いうて、ふたりで、血のあとをたどったら、家の裏手（うらて）の小屋まで、ずうっとついててんて。小屋の中のぞいてみたら、大きな古狸（ふるだぬき）が死んでたんやと。

『子どもと家庭のための奈良の民話３』村上郁再話／京阪奈教育情報出版

血は、古だぬきの居場所を教える役割をしています。

## 涙の役割

そうやって、二、三年するうちに、王子はとうとう、ラプンツェルがふたりの子どもと、つらい毎日をすごしているあの荒野へさまよいこんできました。人の声を耳にすると、王子には、どこかできいたことがあるような気がしました。そして、その瞬間ラプンツェルのほうでも、王子に気がついて、首にとびついていきました。ラプンツェルのなみだがふたしずく王子の両方の目に落ちました。すると、目がばっちりあいて、いままでどおり、見えるようになりました。

「ラプンツェル」『完訳グリム童話Ⅰ』小澤俊夫訳／ぎょうせい

お月とお昼が外をのぞいてみると、そこにいたのは父親でした。ふたりは、
「父さん」とさけんで、父親にとびついて泣きました。お月の涙が父親の右の目にはいると、右の目がばっちりとあき、お星の涙が父親の左の目にはいると、左の目がばっちりとあいて、父親の目はもとどおりみえるようになりました。
三人は、そろって家へかえりました。家では母親が、
「お月、もうしわけなかった。ゆるしておくれ」
と、泣きくらし、目もみえなくなっていました。お月は、そのすがたをみるなり、
「母さん」
とさけんで、母親にだきついて泣きました。お月の涙が母親の目にはいると、母親の目は、ばっちりとあきました。

「お月お星」『日本の昔話2』小澤俊夫再話／福音館書店

右の例はどちらも、悲しみを表すために流されているのではありませんね。まるで目薬の役割をしています。